

令和3年度足立区総合教育会議 要旨

要旨は、議事録から抜粋してまとめた内容であるため、発言の趣旨などは、議事録の発言前後の内容をご確認ください。

【議題】

ICTを活用した学校教育、不登校支援、特別支援教育について

【概要】

コロナ禍で学校現場が大きな影響を受ける中、全児童・生徒1人1台にタブレットが配付され、これからどのように活用していくかという重要な局面に入っている。

今回は、タブレットを活用した学校教育、不登校支援、特別支援教育について、現場の指導者の生の声や活用状況調査の結果などを紹介し、現状、課題、今後の方針等について意見交換を行った。

1 ICTを活用した特別支援教育の取り組み

(1) 特別支援教育におけるICT活用計画の策定

【説明：こども支援センターげんき 支援管理課長】

令和2年度にICTを活用した新たな特別支援教育の方向性を検討し、ICT活用計画を策定。学習支援、教師・学校支援、家庭支援の3つを柱に掲げ、児童・生徒の個に応じた支援を行っている。

ア 学習支援

個々の学力に応じた学習支援と発達特性に応じた学習支援。

イ 教師・学校支援

オンライン相談により、児童・生徒の特性に応じた具体的な指導法について教師を支援。

ウ 家庭支援

支援プログラム等に参加できない保護者に対する動画配信による支援、オンラインによる発達相談。

(2) 学校における取り組み

【説明：鹿浜第一小学校校長】

- ・ 特に読んだり書いたりすることを苦手としている子どもは、タブレットを活用して音声によるアシストやキーボードに文字を入力することで、課題をクリアすることが可能となる。また、個々の学習状況に応じて「eライブラリ」などによるドリル学習もできる。
- ・ 視覚と認知能力を高める学習は、これまで書いて行う活動が中心で集中力がだんだん切れていたが、タブレットに替えて取り組ませると、書く負担のない分、巧みに数字をタッチし、いつの間にか集中して取り組むようになる。

- ・ 体育の授業では、先生が動画で説明することができ、児童が自分の姿を動画で直接見ることによって、課題がどこにあるかを容易に把握することができるようになる。
- ・ 技術科の授業では、実物投影機で先生の作業を実際に投影することで、生徒は先生の指示どおりの作業が可能となる。

(3) 今後の課題について

【説明：鹿浜第一小学校校長】

ア 教員のスキル向上

教員によって温度差があり、どのように解消していくかが重要である。

イ 教員の負担軽減

スキル向上と表裏一体の問題である。

ウ 環境整備

数多くある教材アプリからどのようなものを取捨選択していくかが課題である。

2 ICTを活用した不登校支援

(1) ICT支援の3つの柱

【説明：こども支援センターげんき 教育相談課長】

ア 学習支援

最終的な目標は不登校児童・生徒が自宅から授業に参加できるオンライン授業であるが、すぐにオンライン授業、不登校児童・生徒に特化した授業というのはなかなか難しいため、段階的に実施していく。

イ 学習評価

学校以外の居場所（自宅やチャレンジ学級など）の学習評価について、どういう評価ができるか校長会と検討を始めようとしている。

ウ 相談支援

学校、スクールカウンセラーのオンライン相談は今年度中に開始したいと考えている。こども支援センターげんきでは、8月からオンライン教育相談を実施している。

(2) オンライン授業実施までの手順

【説明：こども支援センターげんき 教育相談課長】

- ・ 最終的な目標は、自宅から学校の授業に参加できること。
- ・ 9月はコロナの関係でオンライン授業を学校でやっていたが、不登校児童・生徒の25%が参加できたという声がある。
- ・ 今年度中には何らかの方向性を出したいと考えている。
- ・ STEP1として、チャレンジ学級、あすテップの授業の相互オンラインを開

始した。

- ・ STEP 2として、例えば学校の別室とチャレンジ学級をつないだ授業ができないか検討し、最終的に学校の授業に参加できるようにしたいと考えている。

(3) 「あすテップ」と「チャレンジ学級」の違い

【説明：こども支援センターげんき 教育相談課長】

ア あすテップ

- ・ 学校内にあり、学校と類似の環境の居場所の位置づけ
- ・ 学校復帰が目的ではなく、この場所で勉強することを目的としている
- ・ 登校時間が決まっている
- ・ グラウンドや体育館を共用するなど学校施設を活用している
- ・ 給食を実施している
- ・ 中学生が対象
- ・ どちらかという学校施設に入ることに抵抗のない子どもが多い

イ チャレンジ学級

- ・ 従来型の適応指導教室
- ・ 学校復帰を目指した指導をしている
- ・ 学校外にあり、登校時間は決まっておらず柔軟に対応している
- ・ 個別指導、コミュニケーション支援も行っている
- ・ 小中学生が対象（小学生専用教室も設置している）

(4) オンライン授業で広がる選択肢

【説明：こども支援センターげんき 教育相談課長】

- ・ オンライン授業を従来のチャレンジ学級の授業に追加した。
- ・ 例えば、月曜日の1時間目は綾瀬のチャレンジ学級では国語と英語をやっているが、オンラインではあすテップなでしこの英語の授業となっている。
- ・ 来年度からはいろいろな授業の選択肢を増やし、通常の対面授業を補完する役割をオンライン授業に求めていきたいと考えている。
- ・ 児童・生徒の状況に応じて、自宅からも参加できるような形もできるため、これと併せて、例えば、数学の単元別の授業といったものを検討していく。

(5) 現場の指導員の感想と課題

【説明：あすテップ支援員】

ア 感想

子どもたちの学習機会の拡充や、より学校に近い環境での学習を展開できた。例えば、英語の教科担当がいない教室にも英語の授業を配信することができ、生徒から「楽しかった」という声も聞かれた。

イ 課題

- ・ 現状、オンライン参加者は、視聴がメインの受動的な学習体験となっており、

子どもから「分からないところが聞けたらもっとよかった」という声もある。今後はチャット機能なども活用して双方向のやり取りに取り組んでいけると考えている。

- ・ 現状、授業配信は単発的で授業の前後につながりがない状態になっている。来年度からは、配信の時間割を年間で固定し、授業の連続性や見直しを持たせ、Google Classroom のチャット機能なども活用し、授業の事前・事後のフォローをしていきたいと考えている。
- ・ 現状、端末や機材の操作といった I C T スキルを持つ指導員が限られているため、指導員向けのマニュアルを作成した。今後は課内研修などにより指導員の I C T スキルの向上に取り組んでいきたいと考えている。

3 夏季休業期間中における持ち帰り端末活用の成果と課題等

【説明：教育政策課長】

(1) 調査の概要

- ・ 7月30日までに Chromebook の整備が完了した小学校28校、中学校35校を対象に実施。
- ・ 中学校は全ての学校が持ち帰りを実施したが、小学校は3校のみ実施。大半の小学校は児童への指導や準備が不足して、持ち帰りができなかった。

(2) 調査結果

ア 実際に与えた課題の内容

- ・ e ライブラリなど、問題を解かせる課題、調べ学習やレポート作成、高校訪問の報告などが多かった。
- ・ タブレット端末を活用した課題を出さなかった中学校が5校あった。

イ 児童・生徒の取り組み状況

- ・ 大半の児童・生徒は、タブレット端末を活用して問題なく取り組んだ。
- ・ 宿題の範囲を超えて取り組む生徒も多くいた。
- ・ 一部の自由課題としたものについては、あまり取り組めていなかった。
- ・ 持ち帰りを実施している学校あるいは課題を与えている学校のほうが、より活用が進んでいる。

ウ 課題や問題点および改善方策

(ア) 課題の準備の時間を十分に確保できず、児童・生徒への説明や指導も不足していた。

→次回持ち帰り時には早期に準備を進め、事前説明や指導時間を十分に取る。

(イ) 家庭での操作をフォローする必要があった。

→今後さらに分かりやすいマニュアルを整備し、HP等でも詳しい情報を家庭に向けて発信していく。

(ウ) 現在、3機種（Windows 端末、L T E 端末、普通の Chromebook）が混合しており、持ち帰りのできない端末の割り当てし直しの必要や、環境が同一でないため課題の選定が限定される問題があった。

→ 次回の機器の更新に向け、機器の統一を検討する。

(エ) 端末で課題を提示しても、児童・生徒側がきちんと確認しているとは限らず、連絡が確実に伝わらない。

→ 児童・生徒が端末にログインする習慣を定着させる。

(3) 持ち帰り端末活用の取り組み全体を通じてわかったこと等

ア 児童・生徒の取り組み方について

- ・ 学校からの指示や課題があれば端末を利用するが、指示や課題がなければ活用しない傾向がある。
- ・ 端末を使って何をするのかを明らかにした上で持ち帰らせることが必要。

イ 教員による準備について

- ・ 課題の作成や提出方法の確立のための準備時間を十分に確保できなかったことが課題。
- ・ 今後は通常授業に取り入れたり、早期に計画的に準備に取り組む必要がある。

ウ 家庭へのサポートについて

- ・ タブレットの操作方法等の問合せが多く学校が対応に追われた。
- ・ マニュアルを充実させ区のホームページにも記載していることを含めて周知をしていく。

エ 端末について

- ・ 3機種が混在していることにより、割り当ての再調整や使用方法の説明が煩雑だとの声が多い。
- ・ 今後は機種の一見揃えた検討が必要。
- ・ 持ち帰り用の端末が全員分ないため、Windows 端末の持ち帰りのための設定変更を12月上旬までに確実に完了させる必要がある。
- ・ 児童・生徒用の予備機や教員用の端末が不足しており、故障時の対応や教員の業務に支障を来している学校がある。

4 教育委員からの主な意見

(特別支援教育および不登校支援について)

- 共通の課題として一番見えてくるのは、機器的なことではなく、これを使いこなす教員のスキルアップである。タブレットが宝の持ち腐れにならないよう、先生たちの積極的な研修参加や情報交換を通じて、その子に合った活用をし、その子の抱えている問題を解消してほしい。

→ 【支援管理課長コメント】

- ・ 教員のスキル向上には、研修の充実が重要と考えている。また、10校で授業実践を先行しており、その先生方を他校に派遣し、ICTを活用した授業作成の支援ができればと考えている。
 - ・ 今年度30校に導入したシステムを活用すれば、子どもの特性にあった指導計画が作成でき、その特性に合わせた指導教材も提供してくれる。
- 双方向のやり取りをどのようにもっと有効にしていくかが課題である。教員サイドの技術指導とともに、生徒と一緒に練習をしていくことが望ましい。
- 【教育相談課長コメント】
- ・ 双方向は誰も前にいなければ可能だが、前に生徒がいる中でオンラインの子と双方向による授業を行うことは相当難しい。ポイントを絞り、例えば手を挙げるタイミングで中の子どもを指すなど、通常の授業と同じように子どもと関わることで実施が可能になるのではないかと考えている。
 - ・ まずは、同じような授業を対面でやってみることが第一段階と考えている。
- ICTに関しては通常学級もそうだが、特別支援と不登校に関しては最優先で進めていかなければならない。それぞれの担当課がいろいろな準備をしているが、まとまってやらないと進みが遅いのではないかと。
- 【教育長コメント】
- できれば4年4月から専管組織を設け、機器を管理していく係と先生のスキルアップといったソフトの部分を進めていく係に指導主事も配置し、各学校とやり取りをしながら進められるようにしたいと考えている。
- eライブラリ、AIドリルを特別支援や不登校の子どもたちに配付されるタブレットへ早めに入れるべき。
- 【教育相談課長コメント】
- ・ eライブラリはチャレンジ学級ですでに使用している。
 - ・ チャレンジ学級に関わっていない不登校の子どもと学校の先生に自宅学習の方法について通知を出し、指導主事の個別相談も行っている。
 - ・ AIドリルについても、来年度、不登校児童・生徒が使用できるようになる予定。
- 不登校の子どもやあすテップの子どもたちのゴールはどこになるのか。そのような子どもたちの中には、コミュニケーションや対人関係は苦手だが、他の才能がある子もいると思う。それを見つけることをゴールにするのか。
- 【教育相談課長コメント】
- ・ チャレンジ学級は、まずは学習定着や集団活動、コミュニケーションをとることができることを目標にしている。目標は学校復帰と言いつつも、それだけではなく、社会的自立といったところを重視している。
 - ・ ほかの才能を見つけることはなかなか難しいが、様々な体験活動を通じてきっかけになれば良いと考えている。
 - ・ あすテップは、そもそも学校には戻らなくて良いと考えている。あすテッ

プの中で学力テスト等も行っており、そのまま卒業した子、高校に入った子もいる。一方、学校に戻りたいと言って戻った子もいる。強制せず戻れるタイミングがあれば戻って良いという形を取っている。

(学校教育について)

- モデル導入しているA Iドリルを見たが、学校での授業や補習で使えて、自学自習でも使える。自分のできないところまでA Iドリルが遡るため、どこでつまっていたのかが分かり、振り返りの機能もあるのでごく優れたドリルだと思った。
- 問題を解きながらクラスでシェアしたり、質問が出たら先生が個人やクラス全員に答えたりできるようなやり取りの機能を備えていると良いと思う。

→【教育政策課長コメント】

Google のアプリ「Classroom」に、先生が宿題を出すと子どもたちがそれを見て、質問を入力するとそれをみんなで見られるといった、掲示板のような機能があり、すでに活用されている。

- A Iドリルの導入に関しては大賛成。個別最適な学びに繋がる。協働的な学びも必要。5教科入っているということなので、ぜひ活用してほしい。
- A Iドリルについてはどんどん進めたら良いと思うが、自分のペースでできる反面、相手の気持ちを考えるという能力が極端に欠けてくることが心配である。道徳や運動会等の共同作業を通じて相手の気持ちを考えることを学ぶ必要があると思う。

以上